

美術館の屋上ではつつじがきれいな季節となってまいりました(この記事を書いているのは5月末です)。彫刻もうれしそうに見えます。まだつぼみもありますので、写真よりもっときれいになるはずです。しかし、花の命は短し、この記事に掲載するころには、姿かたちを随分と変えてしまうのでしょうか。果かなく定められた物事の移り変わりを記憶の中にのみ留めておくなんて美しいかもしれませんが、そんな風にやっていたら、寄る年波には勝てず、先ほど耳にしたことを直ちに忘却の彼方に追いやる昨今の自らを省みると、花の命よりも記憶のほうがはるかに果かないなんてことになりかねません。



ということで、そんな私たちの欠落を補い、視覚的なイメージを記録する革命的なメディアとなった写真に敬意を表して、今回は美術館における写真撮影についてご紹介しようと思います。

新人(若くはないですが)の私が現在担当しているのは、コレクション展や写真関連のことなどです。写真といっても、美術作品としての写真でもなければ、自撮棒を振り回すタイプの写真でもありません。愛知県美術館は多数の作品を所蔵していますが、図録を作ったり、広報用のポスターやチラシを作るためには、精度の高い作品写真が必要となります。そこでどうするか、というと、一点一点作品の写真を撮るのです。とはいえ、スナップ写真のように簡単にいくわけではありません。

作品といっても、絵画もあれば立体作品もあり、巨大作品や脆弱な作品もあります。写真撮影のためにまず、撮影できる場所に作品を設置するだけでも一苦勞です。ここで紹介するのは設楽知昭さんが綿布で作った服を着たまま、その服を画布にしてテンペラ絵具で描いた《目の服・上衣》の撮影シーンですが、服という不安定な形態をとる作品を、絵具の剥離や損傷がないように移動させ、撮影に適した場所に設置するだけで、かなり気を遣います。ちょうど先日まで展示中であった機会をとらえて、展示室内での移動だけで済むように配慮しました。写真は、N学芸員の指導のもと、展示場所から慎重に作品を下ろした後に担架に乗せるように移動させて、撮影場所の壁面に再設置している様子です。



続いてカメラマンの K さんに登場いただきましょう。貴重な作品の写真をより良いものに仕上げるにはやはりプロの技が必要です。まずは機材を展示室に運び入れ、撮影場所を確認してもらった後に、照明の準備にかかります。

みなさんも絵をカメラで撮影したら自分の顔も写りこんでいた(もし怖い絵を写したからといって、こんな場合は心霊写真ではないですね)、記念撮影で顔が真っ黒に写った、など失敗談は多々あるのではないかと思います。作品を撮影する際に、その作品の見栄えを損なってしまったりはイメージ稼業の美術館にとっては元も子もありません。また、作品によっては油彩画や金属を使った作品のように反射してしまうもの、凹凸があって作品内に影ができてしまうものなど、光の扱いが難しいものがあります。照明の当て具合が出来上がりを左右してしまいますのでカメラマンは細心の注意を払い、光量を確認しながら作業を進めます。傘型の機材は、被写体が他人から見えないように隠しているわけではなく、光の当たり具合を調節しているというわけです。





ところで、最後の写真では撮影に使ったカメラが写っていますね。多くの方はご存じないか、最近は目にされていないのではないのでしょうか。これは通称「シノゴ」と呼ばれている4×5インチ(102×127mm)のフィルムを使う大きなカメラです。若い世代はもうデジタルカメラしか知らないそうですが、以前は35ミリフィルムカメラがほとんどでした。その呼び名はフィルムの幅に由来していますが、「シノゴ」は35ミリよりも情報量がかなり大きく、ポスターなどに大きく引き伸ばしてもきめ細やかな画像を得ることができます。美術館業界では「シノゴ」は主流でしたが、昨今の急速なデジタル化の波にのまれて、フィルムカメラの利用は全般に激減し、Kカメラマンも本当に数少ないフィルムカメラの撮影で緊張する、とのこと。それでも愛知県美術館では今後の動静を見守る必要を感じながらも、これまでの「シノゴ」に対する品質面での信頼感がありますし、デジタルではデータのコピーなどによる不正利用に関してコントロールが困難な面があること、色調や解像度などの内容面でも同様に制御が難しいことから、フィルムを採用しています。

ということで《目の服・上衣》の撮影は無事終了、あとは片づけをして、フィルムの納品を待つだけです。

Kさん、ご協力ありがとうございました。

愛知県美術館の作品をあしらったポスターをご覧になったら、それには欠かせない撮影のことにも、ちょっとだけでも思いを馳せていただければうれしいです。

(RH)